

# 潮汐湿地の人と生業

## I スンダシェルフの潮汐湿地

東南アジア島嶼域の海岸部には、広大な面積の低湿地が存在する。例えば、スマトラ東岸、マレー半島南部、ボルネオ沿岸、ニューギニア南岸などである。この低湿地地帯は、きわめて平坦な、100m 以下の浅い海であるスンダ陸棚周縁部を占めている。スンダ陸棚は、洪積世の海進・海退期に刻まれた多くの段丘面をもち、現在の低湿地も、かつては高い台地として長期間の陸上風化にさらされていた。しかし、後氷期の海面上昇と共に沈水ないし、湿地化したものである。

大陸部のデルタが、集水面積の大きさに比べて堆積盆が小さい為に、埋積が速やかに進むのに対し、島嶼域低湿地では堆積盆の面積が圧倒的に大きく、埋積が進まない。埋積の進まない広大な平坦地は、海水面の上昇と共に湿地化する。その湿地には旺盛に森林が茂る。沿岸の汽水湿地はマングローブが茂り、マングローブ泥が堆積する。淡水湿地には、高さ 60 m にも達する降雨林が茂り、それらの高木が倒れたあとには、また高木が伸びる。水づかりの状態で倒木の分解は抑えられる。結局、土砂は堆積せずに、厚い泥炭が堆積することになる。厚い泥炭湿地が広く分布することは、島嶼域低湿地の著しい特徴で、大陸部デルタには見られない。

この低湿地のもうひとつの特徴は、潮汐の干満差が大きいことである。普通 3m、春の大潮では 3.5m を超える。干潮時には、マングローブ帯の前面に広い干潟が出現し、そこにはマングローブ帯からパイオニアが点々と進出する。満潮になると、このパイオニアは海の中に立つ。また、川水は逆流し、川岸をこえて、あるいは水路を通して、陸地に溢れる。干潮時には、溢れた水が再び



図1 インドネシア・マレーシアの泥炭湿地 (Polak 1975 より引用)

川へ勢いよく排水される。

上流へ向うと、干満差は次第に小さくなるが、他方、乾季、雨季の年間水位変動が大きい。雨季に林に溢れた水は、数カ月間湛水が続ける。このような立地に泥炭が堆積する。

干満が上流のどこまで及ぶか、川筋により異なる。南スマトラのパレンバンは海岸から 100km 内陸で、干満差 3m に達する。他方、距離は同程度でもジャンビでは干満はない。逆水現象に関わる要因は複雑である。

マングローブ泥や泥炭の分布する低湿地を、インドネシアではダエラ・パサン・スルット (daerah pasang surut) とよんでいる。この小文ではそれを潮汐湿地とよぶ。潮汐湿地の分布は泥炭の分布にほぼ重なる。図1は東南アジアにおける潮汐湿地の分布を示していると考えて差し支えない。

潮汐湿地の別の特徴は、ごく最近まで 一面の林に覆われていたことである。移民開拓が進む現在でも、尚、東南アジア最大の森林地帯である。森林で残ったのは、その中に入るのをためらわずにはおれない、恐ろしさをたたえた空間だからである。人々は、むしろまわりの水上や水辺に杭上家屋を建てて住む。川岸には、僅かな焼畑地を開く。

この潮汐湿地に古くから住みついて、漁撈や湿地焼畑を行ない、時には林の中の迷路のような感潮水路から海賊として出撃する人々が居た。オラン・ラウトといわれる。オラン・ラウトは一種の生態型呼称であり、部族的出身は様々

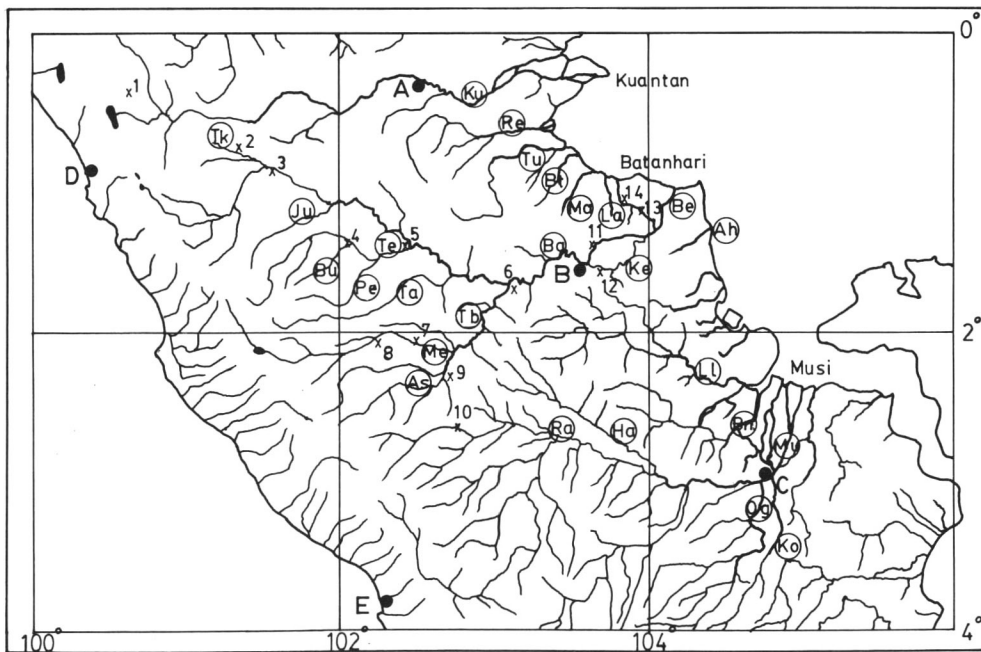
である。ムラユ、ブギス、バンジャール人などが含まれる。彼等は主にマラッカ海峡周辺の潮汐湿地、浅い海、そこにかぶ島々を住処としてくらして来た。オラン・ラウト以外に、ジャワ人、ミナンカバウ人も、やはり、この湿地帯に入りこむ。人々をこの潮汐湿地によびよせる動機は何だろうか。

潮汐湿地の中に突き出た陸地の先端には、古くから、シュリヴィジャヤやマラユなどの国があった。これらの国の物質的基盤は、マラッカ海峡という東西交易路を扼している、その地理的位置によりえられたものである。シュリヴィジャヤはその富を背景として、7世紀には既に、南海における仏教研究の中心地を湿地林の中に作り上げていた。きらびやかな文明のおくりものが唐突に輝やく状況があった。文明は見事な田畑を背景にしている、というのは我々の常識的感覚だが、シュリヴィジャヤはそのような形の田畑はもたなかった。諸蕃誌によると、その国の王は穀類を食せず、サグ（沙糊）を食すとある[Hirth & Rockhill 1970:61]。サグは、今もマレー世界では一般的な食料であり、サゴヤシから採取するデンプンである。シュリヴィジャヤの農業は森林産物の抽出が主体なのである。この性格は島嶼域の農業に、今も濃厚に残っている。マレー型農耕は熱帯降雨林と東西交易路の入口、このふたつの生態的・地理的環境の鑄型で作られている。

以下、スマトラ中央部、バタンハリ川流域の潮汐湿地周辺に視点をすえて、マレー世界の環境と生業の一端を述べる。

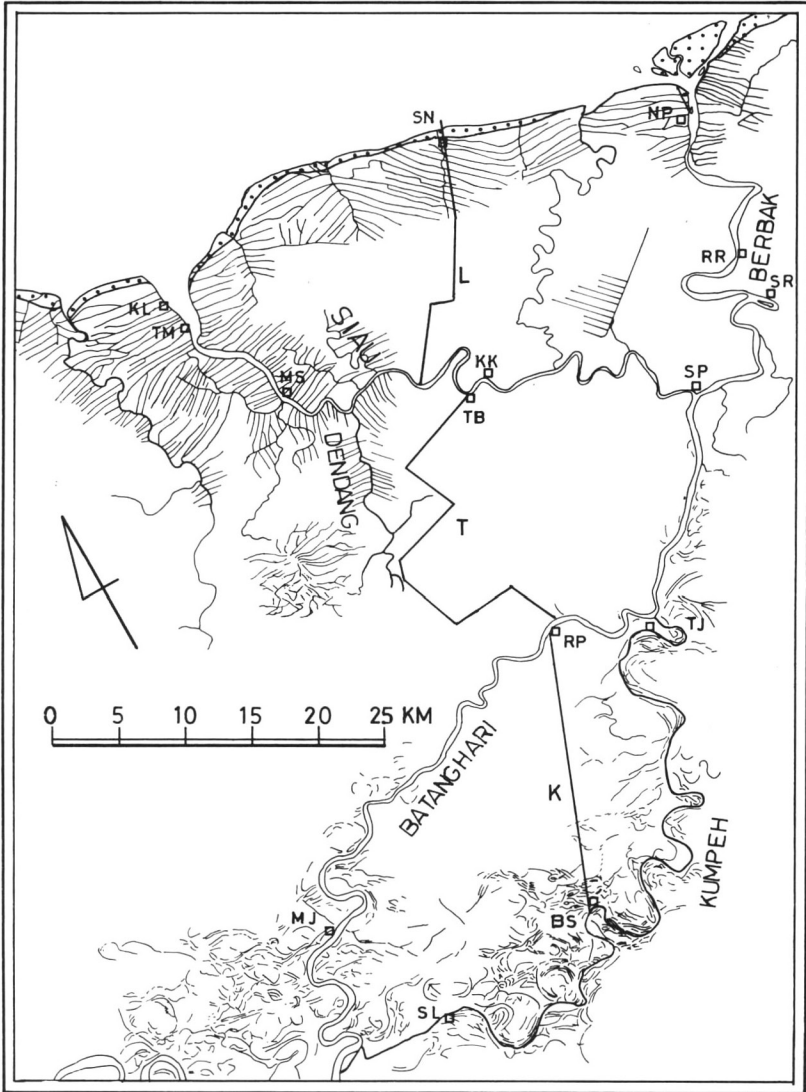
## II バタンハリ川流域潮汐湿地の環境と景観

図2はバタンハリ川と近隣の水系を示している。ミナンカバウ高地に始まり、山地から丘陵地域に下る。スンガイ・ダレ＝ムアラ・ブンゴ＝バンコを結ぶ線から西は、流れの小さい支谷域である。丘陵地域を東へ流れ下る間に主要な支流4本が合流する。ジュジュハン川、トゥボ川、タビール川、トゥンプシ川である。ジャンビの町は丘陵の末端に位置している。ここまでは中流部である。ジャンビの町を出はざると、すぐクンペ川を分かすが、まもなく再び合流す



[都市] A:レンガット B:ジャンビ C:パレンバン D:パダン E:ブンクル [町村] 1:バガルユン 2:スンガイ・ランサット 3:ス  
 ガイ・ダレ 4:ムアラ・ブンゴ 5:ムアラ・トッポ 6:ムアラ・トゥンブシ 7:カラシ・ブラヒ 8:バンコ 9:サロラングン 10:スルラン  
 グン 11:ムアラ・ジャンビ 12:ソロック 13:コタ・カンディス 14:ムアラ・サバック [川] Ah:アイル・ヒタム As:アサイ Ba:バタンハ  
 リ Be:ブルバック Bn:パニユ・アシン Bu:ブンゴ Ha:ハリ・ルコ Ju:ジュジュハン Ke:クンベ Ko:コムリン Ku:クアナン  
 タン La:ラガン Ll:ララン Ma:マンダハラ Me:ムランギレ Og:オガン Pe:ブルバット Ra:ラフス Re:ルテ Ta:タビル Tb:トウ  
 ンブシ Te:トッポ Tk:タクン Tu:トゥンカル

図2 バタンハリ川と周辺の水系



[地名] BS: バンツ KK: コタ・カンフィス KL: カンホン・ラオト MJ: ムアラ・ジャンピ MS: ムアラ・サバック NP: ニッパ・パレジャン RP: ランタオ・パンジャン RR: ランタオ・ラサオ・デサ SL: ソロック SN: シンプルナイク SP: シソパン SR: スンガイ・ランブート TB: トウルック・ブアン TJ: タンジュン TM: トウルック・マジュリス

図3 バタンハリ川潮汐湿地の地文 (1972年撮影の10万分の1の航空写真による)

る。分流地点より下流は既に潮汐湿地より成る下流部である。北東流して、シンパンで、西流するバタンハリ本流と、北流するブルバック川に分かれる。両川で抱かれた沿岸低地はブルバック・デルタと呼ぶ。

ここでは、本論の主要テーマである潮汐湿地の生態的環境を述べておく。

潮汐湿地の様子を10万分の1の航空写真(1972年撮影)で見よう(図3)。単調な、じゅうたんのように見える湿地林の中に、いくつかの模様が見える。タンジュンまでのバタンハリ川、クンペ川沿いに、半月状の線が何本も並ぶ。川の蛇行跡の多いこの地域は、①中流部移行帯である。このあたり、川の水位は雨季乾季の年間変動が大きく、変動幅は4.5m程もある。潮汐変動は乾季に見られるが、1m以下である。

この北にひろがる広大な湿地林は、②下流部中央帯とよぼう。水位変動は上記に似る。

沿岸部には、感潮水路から魚骨状に伸びる、農民開拓の排水水路が無数に見られる。1940年代の地図では、これは川口部に僅かに目立つ程度である。30年間で開拓が著しく進行している。この地域を③沿岸帯とよぶ。ここでは水位は毎日3.5m上下する。

海岸線には、薄く④マングローブ帯が張りついている。

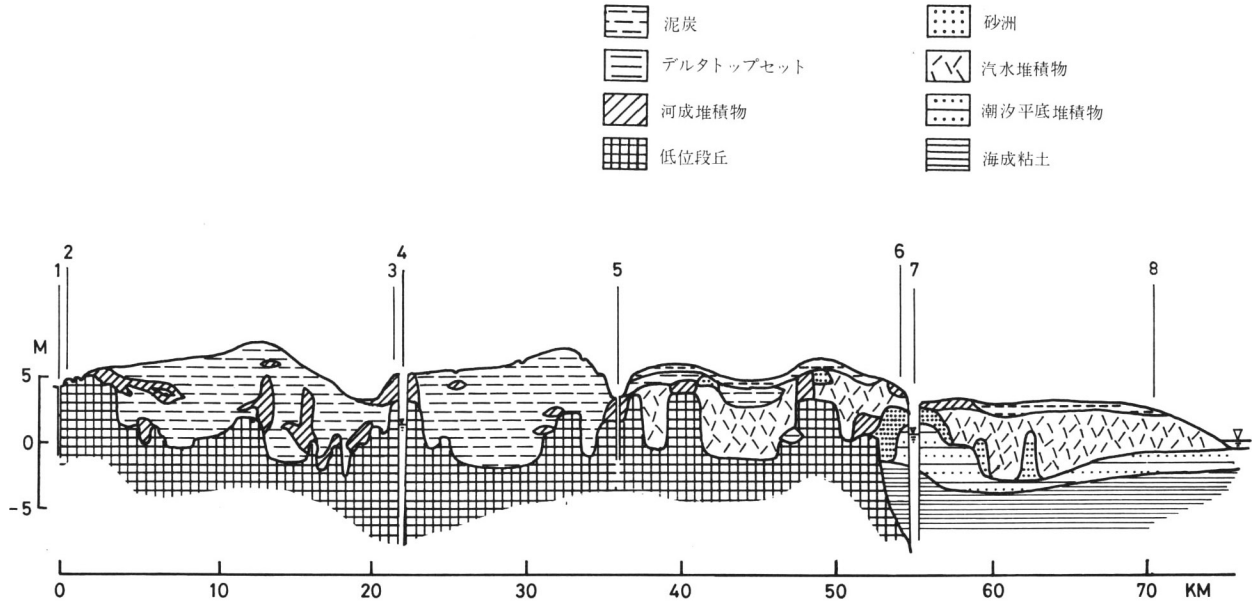
ドゥンダン川南西部に、放射状模様が見られる。これは中流部からとびはなれた⑤残丘である。

筆者は図3に示したK、T、Lの径路に沿って踏査を行なったが、中央帯の林は、1972年に比べて著しく減少し、径路Tの半分より海岸まで、林は殆んど姿を消していた。

次に、調査径路に沿って、地形断面図と堆積層序を簡単に述べておこう。図4はボーリング調査の結果をまとめたものである。

中流部移行帯では、灰白色の基地中に赤褐色の班紋のある、堅硬な粘土が地表に露出している。これは低位段丘である。川沿いではその上に更に自然堤防が発達している。

低位段丘面は中央帯に向かって低下し、地下に没する。一種の後背湿地地形で



1: クンベ川 2: バンソ 3: ランタオ・バンジャン 4: バタンハリ川 5: ドゥンダン川源流部 6: トゥルック・ブアン 7: バタンハリ川 8: シンブルナイク

図4 潮汐湿地の地形と堆積層序 (高さは平均潮位からの高度, 古川・スビアンディ, 1985)

ある。そして、その上には、厚い泥炭が堆積している。時に7mを超える。泥炭は圧倒的に木本植生の遺体である。組織の見える木片、枝、樹皮、葉、根、それに不定形赤褐色の植物泥の混合物から成る。中央帯中央部に向って、泥炭は凸レンズ状に厚くなり、中央部では、きわめて含水比の高い、未分解木片と水がゆ状植物泥から成る泥炭が分布する。

泥炭層の中には、時々無機質粘土層が挟在する。これは河成堆積作用の影響を示している。湿地に泥炭が堆積する途中で、川筋が流路を変え、川沿いに溢流堆積物が侵入し、泥炭形成を中断したものである。しかし、泥炭の成長につれて地盤が次第に高まり、河成堆積作用は低下し、全体として、雨水函養型の泥炭湿地が広く形成されたものである。

泥炭堆積が始まった時代は C<sup>14</sup> 年代測定法によると、径路 K の 7.5 m の泥炭が 5710 ± 130 年 BP、径路 T の 4.3 m の泥炭が 6830 ± 180 年 BP、径路 T で、マングローブ泥に覆われた 3.9 m の泥炭が 5890 ± 180 年 BP である。泥炭の見かけの堆積速度は、途中が速く、後で遅い。先述の 7.5 m の泥炭では、7~4m の間が 2.2 mm/年、4~2m が 6.3 mm/年、だが 2 m 以上では、0.6 mm/年である。この速度は泥炭の堆積と分解・圧密を含むので、上部の小さな値は、泥炭分解や圧密に由来するのかもしれない。

6800~5700 年 BP という時代は、日本では縄文海進の時代に相当する。それ迄高い台地であり、陸上風化を受けて赤褐色斑紋土の形成された低位段丘は、後氷期のこの海進時代に湿地化し、そこに泥炭が堆積し始めたことが判る。

一方、中央帯から沿岸帯への移行部（図4の5から6までの部分）は堆積層序が異なる。結論を言うと、ここでは低位段丘の上にマングローブ泥が厚く堆積する。海水面の急激な上昇で、台地が一举に汽水域に覆われたことを示す。

この沿岸移行部の基盤は、図4に見るように、起伏5mに及ぶ高みが処々にあり、これらの高みは、汽水域の中に島状に突出していただろう。この地域は海進海退に伴って、海域と陸域が頻繁に交代したと考えられる。地盤高、海水位、侵蝕・堆積の関係によって、複雑な堆積層序が形成されている。層序から復元すると、表1に示したような堆積環境が推定される。



表1 バタンハリ川下流域の地域区分

地域区分	層序類型	景観
中流部移行帯	台地面（低位段丘） 蛇行跡低地 自然堤防	ゴム林 短期休閑水田（減水季稲） 村，果樹林
中央帯	泥炭被覆台地 自然堤防	湿地林 小村，アレンヤシ
沿岸部	台地面（沖積段丘／低位段丘） 汽水浸入泥炭被覆台地 汽水浸入台地 自然堤防	湿地林→政府開拓地，陸田（雨季作稲） 湿地林→政府開拓地，陸田（雨季作稲） 湿地林→政府開拓地，陸田（雨季作稲） 小村，水田（雨季作稲）サゴヤシ
沿岸帯	旧砂洲 陸化潮汐平底  旧砂洲	湿地林→政府開拓地，竹ヤブ 湿地林→農民開拓地，水田（雨季作稲）， ココヤシ，サゴヤシ 湿地林→農民開拓地，水田（雨季作稲）， ココヤシ
マングローブ帯 残丘	マングローブ泥 丘陵斜面 谷底	マングローブ ゴム林，竹ヤブ，果樹林 短期休閑水田（雨季作稲）

図4の7周辺には巨大な砂洲地帯がある。この砂洲の形成は上記の汽水湿地を閉塞したものであろう。縄文海進期，かなり長期にわたって安定した海岸線であったと思われる。沿岸帯では，低位段丘面は既に地下深く没している。ここは海進期には完全に海域であった。沿岸帯の堆積層序は単純である。地表下6,7mには海成粘土がある。その上には砂-粘土-シルトの薄層が交互に堆積した堆積物がある。これはタイダル・フラット（潮汐平底）の堆積相である。その上にはところどころに砂洲が発達している。更に，これらを覆って，マングローブ泥が厚い。

以上のことから，現在の沿岸帯は，縄文海進の頃に，浅海ないし，潮汐平底であったと思われる。海退が進行すると，マングローブ帯に遷移し，次第に海岸線は前進したもので，きわめて若い陸地である。表面は，陸化後の淡水湿地に生じた腐植質のデルタトップセットが覆っている。

以上の結果をまとめると，潮汐湿地帯は6地域に区分され，堆積層序類型は15の型が認められる。これを現景観と合わせて一覧表にして表1にまとめた。景観を簡単に説明しておこう。中流部移行帯には，ムアラ・ジャンビのような，

古い集落がある。低位段丘、自然堤防にゴム林と果樹林が広い。蛇行跡低地は、雨季に深く湛水するので、水のひく乾季に稲を植付ける。

中央帯中央部は泥炭被覆台地で、厚い泥炭湿地を密林が覆う。ロタン、ジュルトン（天然ゴム）、ガハル（沈香の類）、木材の抽出が主な生業である。

沿岸移行帯も最近まで湿地林で覆われていたが、現在はここに政府開拓地が広がりつつある。自然堤防には従来から小集落があり、サゴが多く見られた。政府移民は内陸に入植し、乾きすぎた開拓地の陸田で、雨季に、水稲とも陸稲ともつかぬ稲を植え、乾季、裏作を行う。

沿岸帯は農民開拓が早くから入っており、林は姿を消している。農民は魚骨状に水路を掘削し、湿地を排水して、稲とココヤシを栽培する。一部には潮汐灌漑水田が可能である。川沿いにはサゴヤシが点々と残る。

### III バタンハリ川流域の人と集落<sup>1)</sup>

1820年にバタンハリ川をジャンビまで遡航した Crooke の記録によると、この間に見た村は僅かに 12、家 112 戸、住人は全部で 600~700 人、殆んど全面、林に覆われている [Crawford 1856:161]。

20世紀末の今日でも、まだ厚い密林に覆われる潮汐湿地は、しかし、意外に古くから、種々の文明を受け入れ、住民の中には、トルコ、アラブ、インドなど遠国の人々の血がまじり合っている。この節では、バタンハリ流域の歴史的変遷を示す資料をひろっておきたい。いわば筆者の備忘録である。

バタンハリ流域に出土する最も古い碑文は、中流域トゥンブシ川支流のムランギン川沿い、バンコの東約 25km にあるカラシ・ブラヒ (Karangbrahi) で発見されている。古代マレー語による石碑で、シュリヴィジャヤの統治に対する恭順をよびかけている。この石碑と同文のものがバンカ島のコタ・カプール (Kotakapur) で発見され、それには 686 年 AD に相当する年代が付されている。このシュリヴィジャヤは、パレンバンのブキット・スグンタン (Bukit-seguntang) 出土の石碑によると、682 年に水軍をもって行われた遠征後、その

広い支配域を確立した。他方、シュリヴィジャヤの支配を受け入れたバタンハリ流域は、中国の求法僧義浄の著書中にその名が現われる「モロユ（末羅遊）」(Moloyu) と考えられている。義浄は671年、インドへの途上、シュリヴィジャヤに6カ月滞在し、その後引き続き2カ月「モロユ」に滞在した。シュリヴィジャヤには1000人をこす仏僧がおり、仏教研究の中心地であった。インドからの帰途、685年から695年迄、再びシュリヴィジャヤに滞在したといわれる。

シュリヴィジャヤや「モロユ」は港湾国家として未曾有の繁栄をとげたようである。インドのナーランダで発見されている銅板文書にはスヴァルナドヴィーバ(スマトラ)の国王、バーラプトラ(Bhalaputra)が860年頃、この地に僧院を建立し、その維持の為に村を寄進したことが記されている。

この繁栄は、1275年、クルタナガラ王のスマトラ遠征(Pamalayuといわれる)まで続くのだが、この間の遺跡には次の諸例がある。

バタンハリ川潮汐湿地の自然堤防に、ムアラ・ジャンビがある。ここにはスマトラ最大といわれる仏教寺院遺跡が残っている。4基はレンガ建物が残る。最大のもはチャンディ・ティンギで、周囲150m四方の寺域の中に、レンガ作り3層回廊式の建造物がある。ここから東へ、今は空濠となった10m程の濠で囲まれたアスタナまで300m程の道沿いには、青磁、白磁、赤陶等の陶磁器片が大量に出土する。これらの寺院の年代は、はっきりはしないようだが、発掘したSchnitgerは11~12世紀のものとして推定している。石刻のナンディ像と仏陀立像が二つ。それに最近、頭部を欠く石刻婦人像が発見されている。これは全体的なデザイン、ネックレースや玉の模様などから、シンゴサリ出土の般若波羅蜜多像のコピーと推定されている。

ジャンビの町の東、クンペ川沿いのソロクで、大きな石刻の仏陀立像と、四つの大きなマカラが発見されている。マカラのひとつには1064年相当の日付がある。

更に最近だが、沿岸帯に近いコタ・カンディスで、ブロンズ製の女人立像が岸直下の水中から偶然に発見されている(1982年8月13日付Kompasに記事がある由)。岸はマングローブ泥上の沖積段丘である。村人の話では、集落のす

ぐ背後、土中のレンガ積み壇の中にも彫像があるとのことである。

13世紀後半には、シャムの勢力がマレー半島を南下し、そこでのジャワの影響力を低下せしめる。クルタナガラ王 (Kertanagara) は1275年スマトラに兵を進め、「マラユ」＝ジャンビを前進基地とし、シャムを牽制する。この時代の石彫がバタンハリ上流域のラムバハンで発見されている。不空羅索観音を中央に配したもので、1286年、クルタナガラ王の命によりジャワから運ばれ、ジャワとジャンビの結びつきを強める為に「マラユ」の王に寄進された。

1347年、「マラユ」の王、アディティアヴァルマン (Adityavarman) (彼は一時マジャパヒットの廷臣であった) は、この像をスンガイ・ランサットからラムバハンに移した。スンガイ・ランサットでは、アディティアヴァルマン自身を模した巨大なバイラヴァ像も発見されている。

アディティアヴァルマンの「マラユ」国は次第に内陸へ、結局、パガルユン (Pagarruyung) 地域まで移動し、ミナンカバウ王国に変身したと推定されている。

14世紀半ば、ジャワはシュリヴィジャヤを攻める。それ以後、かつての一大交易港パレンバンは旧港とよばれ、交易センターとしての機能と権力を失う。

「マラユ」国の中心が内陸へ移ったことと相まって、ここにスマトラ東岸の港湾都市は、マラッカ、ジョホールにその位置をとって代わられる。

シュリヴィジャヤの興隆とその衰退が何に帰因しているのか、諸説あるわけだが、私の見た文献の中で印象に残ったのは諸蕃誌の次のような文である。英訳ではこうなっている。「この国 (三仏齊) は大洋中、海峡を扼す位置にあり (中略)……昔は他国の海賊を締め出す為に鉄の鎖をはっていた (中略)……商船が入港する時はそれを下げる (中略)……商船が寄港することなく通過しようとする、人々は船を出して決死の勢いで攻撃をする。この国が交易港として大をなす理由である」。当時は海賊が多かったことが判る。それに随分、強引な商法である。船が少ない間はとも角、海峡経由の交易船がふえてくると、この強引な商法は、他の交易国にとって重大な障害になることは容易に推察できる。チョーラや、ジャワのシュリヴィジャヤ攻撃もこのあたりの事情に根ざしているように想像される。

15, 16 世紀のジャンビの歴史は伝承の世界にうずもれてしまうが、次第に現在のジャンビの町を中心とした国が出現する。オランダ時代にまとめられた記録は次のように述べている [Tideman 1938:61-83]。

バタンハリ川河口に近いムアラ・サバックに住む、ミナンカバウの女王プトリ・ピナン・マサク (Putri Pinang Masak) と、漂着したトルコの王ダトゥ・パドゥッカ・ブルハラ (Datuk Paduka Berhala) の結婚により生まれた4人の子供の内のひとり、オラン・カヨ・ヒタム (Orang Kayo Hitam) が、「マラユ」＝ジャンビにジャワからの独立をもたらす。16世紀初頭、独立ジャンビの国王即位式に立ち会った9人の王族、及び後に派生した3人の王族から成るドゥアブラス・バンサ (Duabelas Bangsa) の王国が生まれ、ジャンビから、バタンハリ本流沿いに集落が発展していく。12国はジャンビの国王に対する貢納以外に、特定の徭役義務を分担した。それらは、戦士、工兵、運搬、儀礼兵、饗宴、行列護衛、北面、近侍、宮殿護衛、傘もち、である。

他方、バティン (Batin) とよばれる住民がいた。これは12王国の住民よりも古いと考えられている。トゥムブシ川、ブンゴ川、トゥボ川、ジュジュハン川の支谷地域に勢力を張っていた。国王はこれらの集落の首長 (バティン) に称号とその領域を特定する任命勅令を発行する。バティンがこれを受け入れると、国王の支配権を承認したことになり、また逆に、その地域でのバティンの称号と領域を国王が承認したという構造になっている。バティンは2年半に一度、黄金で税金を払う。

国王のこのような懐柔策に同意しなかったバティンもあり、それらは、トゥボ川、ブンゴ川の支谷地域に自治地域として残る。

より新しい集落として、プングル (penghulu) とよばれる移住民がいる。彼等はミナンカバウから、金探しに来た移民で、タビル川上流、プルパット川上流に見られる。プングルはバティンに対して従属関係にあり、国王とは無関係である。

結論的には、バタンハリ本流の集落は、ミナンカバウと沿岸ムラユの混交した住民が占め、支谷地域は、ミナンカバウ要素のより強い住民が居住していた

といえよう。ところで、ミナンカバウは元来、内陸部に入った「マラユ」の謂であるとすると、ミナンカバウと「マラユ」の混交とは意味をなさないわけだが、アディティアヴァルマンが、パガルユンに移って作られた碑文には南インドのグランタ文字や、タミル語で刻まれたものがあり、南インド移民の多かった状況が指摘されている。ミナンカバウ高地へ移った「マラユ」勢力は、インド的要素の強い集団に吸収されたと推定される。オランカヨ・ヒタム以降のジャンビ王国の住民は、したがって、ミナンカバウ、つまり「マラユ」をとりこんだインド勢力と沿岸ムラユの再混交過程にあると想像している。

#### IV 潮汐湿地の生業

ジャンビ州の人口はスマトラ各州同様、最近急速に増加している。中でも著しいのは沿岸帯で、そこは米とココヤシの一大産地である。沿岸帯の人口は、1930年に3万3400人、ジャンビ州全体の13.6%であったが、1982年の統計では32万人にふえ、全体の21%を占めている。ところで1930年の統計は、部族別の数字も示す。それによると、ジャンビ人13万6000人(55.5%)、ミナンカバウ人5万8000人(23.6%)、次いで、バンジャール人が1万6000人(6.8%)と大きな比重を占める。現在は、ブギス人が大きな比重を占めるだろう。要するに、沿岸帯の開発と人口増加に寄与したスマトラ外からの流入は、ここ100年以内では、まずバンジャール人、ついでブギス人である。それでは彼等が流入する以前の潮汐湿地の生業はどんなものだったろうか、またそれは移民の大量流入によって、どんな変化を受けただろうか。次にそれを辿ってみよう。

##### 1 伝統的生業

まず、陸上の土地利用だが、沿岸帯では、川沿いの湿地で、サゴヤシ栽培と焼畑の稲栽培が重要なものであったろう。

ブルバック川河口部の集落ニッパ・パンジャンの元パッシラ、アハマッド

(Ahamad) 氏に、戦前の主食を聞くと、米とサゴヤシであったという。サゴヤシは、ニッパ・パンジャンから南へ、ブルバック川沿いに長く続くサゴヤシ園で栽培された。ここは沿岸帯の川沿い部分で、自然堤防の高みがなく、満潮時には川沿いの数百メートル幅が水びたしとなる、そういう立地である。

ところで、このサゴヤシ園の成立を聞くと、こちらの意図する論旨から外れるのだが、面白いことが判って来る。アハマッド氏もそうだが、カンボンラオトの元プングル、ランタオ・ラサオ・デサの現プングル等、ブルバック・デルタの古い集落の首長は、ひとつのファミリーの出自で、彼等の祖先は、パンゲラン・ウィロハディクスモ (Pangeran Wirohadikusmo) といい、19世紀の後期に東ジャワからジャンビへ来た移民である。イスラム神学教師として、スルタン・タハに召しかかえられ、その篤い信任をえて、外交についてもタハの右腕として活躍した。1887年に、現在のランタオ・ラサオ・デサを領地として与えられた。ウィロハディクスモは農業についても種々の工夫を行い、潮汐湿地の開拓を進めた。先述のサゴ園もそのひとつである。湿地林の中での小規模の焼畑栽培は、動物害、虫害を受けて大変不安定である。食糧安定の為、サゴヤシ園を開いたと伝えられている。

大きなサゴヤシ園は、バタンハリ本流のエステュアリの底部、ムアラ・サバックの対岸にもあった。そこには、バンジェルマンシから約50年前に移住して来たバンジャール人の掘削した、パリット・サゴ (Parit sago) という小さな水路がある。その人、ハジ・モハマッド (Haji Mohamad) 氏に当時の状況を聞くと、この水路入口に1936年頃、中国人がサゴ工場を作り、1945年まで操業していた。モハマッド氏等は、伐採したサゴヤシを水路にうかせて工場へ運んだ。年間100本も切ると、十分な現金収入がえられた。代金で米を買い、朝はサゴ、昼夜は米飯をくったという。

自分でサゴヤシ澱粉をとる場合、水路沿いにサゴ洗い場を設ける。サゴヤシは切り倒して1m長位に切り揃え、二つ割にし、ズイをおろし金でこすりとり、サゴヤシの葉鞘を利用したトユの中で、水をまぜて澱粉をしぼる。白い汁は、ふるいを通して容器にうけ、沈殿させる。これをくり返すと、細粒の良質澱粉

がえられた。

サゴの調理法は3通りあった。ンゴロ・ンゴロ (ngoro-ngoro) は熱湯を加えてクズ湯状にしたもので、時にバナナ、米もまぜた。サグルンダン (sagu rendang) は鍋で乾燥サゴを煎ったもので、ココナットミルクを加えて食べる。レンペン・サグ (lempeng sagu) は、乾いたサゴヤシ澱粉に塩、ココナットミルクをまぜ、水を少し加えて、つなぎにする。これを特別な鍋に入れて手で均らし、ふたをして火にかける。でき上りはチャパティに似ている。

サゴヤシ澱粉はインドネシア島嶼で重要な食糧である。マルクで、町はずれに入ると、今もサゴヤシとイモは主食である。戦前のバタンハリ流域も、サゴヤシ圏の刻印をしっかりと帯びていたわけである。

三仏齊の王が穀類を食わず、サゴを食うとの記述に続いて、諸蕃誌はその産物をあげる。それらは亀甲、カンファ、沈香、ラカ木、丁字、サンダルウッド、カルダモンである。外国商人は、金、銀、陶磁器、絹にしき、絹紗、砂糖、鉄、米と交換する、とある。12、13世紀、スマトラ東岸の主食はサゴであり、米は僅かに輸入される程度だったと推定される。

沿岸帯へとりつくパイオニア達の最も重要な生業は、勿論、漁撈である。パイオニアは、オラン・ラオト、ムラユ、ムラユ・ティムール、それにブギス人などである。ブギス人は出自が比較的是っきりしているが、その他の場合、区分は漸变的である。オラン・ラオトはどちらかと言うと、マラッカ海峡の島々に住む人々を指し、ムラユは、バタンハリ、トゥンカル、ムシなどの地方住民、ムラユ・ティムールはマレー半島やカリマンタン由来のムラユ、といった意味が含まれている。これらのパイオニアが漁撈を行いつつ、潮汐湿地周辺を転々と移動する、そういう世界が存在する。

バタンハリ川河口にはトンネル網をおろすバガン (bagan) 漁が多い。これはいわば定常漁場だが、移動漁場も沢山ある。乾季は、ジャンビとパレンパンの境の感潮水路とその海域へ出漁し、西風が強くなる前に、ブルハラ岬をまわって戻って来る。

雨季は、カンポンラオトから、リアウ州のクアラ・エノックまでの間で漁を



する。

転々と移動する内に、各地の潮汐湿地に土地勘をつけると、マングローブをぬって潮汐水路を分け入り、林を少し切り開いて小屋を建て、焼畑に稲を植える。時には水路を掘削して排水し、ココヤシを植える。こういった小さな開拓地を、あちこちに幾つも持っている。これが潮汐湿地のパイオニア達の伝統的生業スタイルであった。

## 2 バンジャール農耕

ところが、19世紀末ないし、20世紀初頭以降、大きな変化が起る。バンジャール人による定着的湿地開発である。カリマンタンのバリト川流域は、19世紀後半、バンジュールマシン王朝の継承問題に端を発して、オランダの介入とそれに対する反乱が始まり、不安定状況が長らく続く。丁度その頃シンガポールを中心とする、オランダ、イギリス勢力による海運網の確立もあずかって、バンジャール人は大挙、マレー半島やスマトラ東岸に移住する。ジャンビでは、トゥンカル川流域にその集中域がある。

クアラ・トゥンカルの元チャマット (camat) マスダール (Masdar) 氏の父親は、そのような移民のひとりとして1914年にトゥンカル川河口へ来た。丁度、初代ブングルにタンジュン・ピナンからのムラユ・ティムールが選ばれた頃で、ムラユの漁師村があった。バンジャール人達は林を伐開し、水路を掘削して、湿地開発を行なう。開いたフマ (huma) に稲を植え、同時にココヤシを植える。ココヤシが樹冠を伸ばすまでの3、4年は稲を植えることができる。しかし、次第に溝と畝に掘り分け、ココヤシ園に切り換えていく。開拓は次第に内陸へ進む。

稲作法は次のようなものである。ニッパ・アタップ (atap) かバナナの葉に泥を薄くおき、芽出し粃をばらまいて、バナナの葉でおおう。これを床机の上か、畦状の高みにおく。1週間で4指位に伸びると、苗をアタップからはぎとり、ふとんを巻くように巻いて、フマに運ぶ。そこには第2苗代用地を準備しておく。巻いた苗代をマッチ箱大にちぎり、掘棒 (asak) であけた穴に植える。

第1苗代をスマイ (semai) またはタブラン (taburan), 第2苗代をラムバカン (lambakan) またはラチャカン (lacakan) という。第2苗代に更に40日おいた苗を, 11月頃, やはり掘棒移植する。この時本田は乾いている。やがて雨もたけなわとなると, 時々, 湛水する。小さなパランで1回草とりをする。早生稲は5カ月後, 普通稲は6カ月後に穂摘みナイフ (renganan) で収穫する。これは要するに湿地焼畑の稲作法である。しかし, 焼畑とはちがって, 最終的にはココヤン園ができ上る。

排水のよい沿岸部や水路近くはこの経過で数年後にヤン園になるが, 排水の悪い内陸部では稲作が継続する。すると当然, カヤツリ草がふえ, 高く茂る。バンジャール人は特徴的な草処理を行なって, 定着水田を確立する。草処理の方法は次のように行う。(1)2mの丸太をころがして, 高く茂ったカヤツリ草をなぎ倒す。これをインジャ・インジャ (injak-injak) という。(2)その後, ふたりがかりで, カヤツリ原に切目を入れる。ひとりが2丁のパランを草の上に支え, もうひとりがパランを下に押しつけながら前進する。カヤツリ原は50cmから1m幅の帯状に刻まれる。(3)次に, パランまたはタジャック (tajak, ゴルフクラブのような大鎌) で, カヤツリ草の根際を横になぎ, 草をはぎとって巻く。2m毎に巻いた草をつむ。水田表面には, カヤツリ草の根網層が露出する。(4)しばらく放置し, 草の芽が再び出ると, またパランで切る。(5)巻きあげた草は反転させる。腐ってしまうと, ほぐしてばらまき, 肥料にする。この後, 移植する。

潮汐湿地の開拓で最も重要なのは排水路の掘削である。泥炭から出る酸性水を排水し, 表面排水で表土を落ちつける。また, 小舟による交通路として重要である。3.5mもの潮汐差があるので, ひき汐時の水勢を利用して, 柔らかいマンダローブ泥を掘削するのは, むしろ容易である。一種の水力工法である。バンジャール人が移住した時, 既にムラユが短い水路を掘削しているのを見る。彼等はそれを延長し, また, 新たに掘削する。開拓は何人かのグループで行う。水路は川から直角方向に掘るが, 250mはパリット・コンシ (parit konsi), あるいはスワ (suwa) といい, 共同で掘削する。それから内側の土地は1~2ha単

位に区切り、各自の土地をくじびきで割りつける。割りつけが決まると、3カ月以内に分担水路の掘削を完了する必要がある。遅れると、クバラ・パリット (kepala parit, 水路長) が土地を他人にふりかえてしまう。掘削後も、6カ月以上、林を開かないで放置すると、長老が、やはり他人の土地に割り当ててしまう。林が残っていると、豚の害がふえるからである。水路清掃を布告後1カ月以内に行わない者は賠償金を水路長に支払わねばならない。支払わない場合は、その者の作物を誰が収穫してもよい。様々な規制措置がある。しかし、これは、実際には、落ちこぼれが出ないようにという方向で働いている。

バンジャール農民は、このように湿地焼畑に元々存在した技術を体系的に組み上げて、潮汐湿地における定着農業の方法を創出した功績を保有している。

### 3 ブギス人の「開拓」

ブギス人は戦士として有名である。海域世界のことだから、水軍である。パレンバン、ジャンビ、マラッカ、ジョホール、アチェ等、港の間の抗争時になくてはならない戦力であった。したがって、ブギス人は古くから、マラッカ海峡地域に來住していた。その移動が急激な増加を示すのは、スラウェシが戦乱にゆれる時である。17世紀後期のオランダ＝マカッサル戦争の時代、亡命ブギス人は東南アジア全域の海岸におしよせた。ジャンビにも来た。トゥンカルの領有をめぐる、丁度ジョホールとの抗争が始まり、戦力を必要としていたジャンビは、1679年、バンタムに亡命中のダエン・マンギカ (Daeng Mangika) を招いた。このことは周辺地域に亡命していたブギス人をジャンビへよびよせる結果となった [Andaya 1975:12].

最近では1950年代のカファル・ムザカルの反乱時に、やはり多数の亡命者が出た。彼等は、カリマンタン、スマトラの潮汐湿地の「開拓」に入りこんだ。ジャンビ州でも、ブギス人の増加は著しい。

ブルバック・デルタには1955年以降に出現したブギス人の町が三つある。ブギス人の「開拓」は、バンジャールの創出した湿地開拓法をならい、それをフロンティアの林で大規模かつ組織的に実習してみせるというおもむきがある。

彼等は林の伐開，水路掘削から，植付け，粃精米，運送，販売までの過程をワンセットにして完結させてしまう。いわば，米プランテーションを経営する。

開拓の経過は次のように始まる。移住したブギス人は，農民，漁師，小商人で，密輸などを行なっている。やがて，漁師なかまのとりまとめ，ココヤシの仲買，密輸などで頭角を現わす男が出てくる。これらの仕事は互いに重なり合っている。しかし，短期間に金を儲けるには密輸が一番はやい。リアウ州のクアラ・エノックはそのような密輸基地のひとつであり，10人程で作るグループが沢山ある。3トンのボートに200馬力の船外機を2台積んだ高速艇でシンガポールへ行く。1航海の資金は3000万ルピア＝750万円，これで，テレビ，ビデオ，カメラ等を買いつける。税関の目をかすめて，高速艇でクアラ・エノックへ戻り，品物を処分する。利益率は最近では低下して，100%どまりという。

資本を蓄える間に，いろいろな人間とも知り合う，頭角を現わした男が指導者となって，かねて目をつけてある湿地の開拓に入植する。資本蓄積を密輸で行っている間は陰の時代である。その間，彼はヒトではない。たえず逃げかくれしている。開拓の指導者となって，初めて日なたを歩けるヒトになる。これは，指導者につき従う仲間も同じである。

ブルバック・デルタのシンブルナイクは，そのようなブギス人集落のひとつで，1956年にハジ・カンナ (Haji Kanna) が開拓を始めた。彼は入植直前まで，カンポン・ラオトで漁師をしていたという。当時，シンブルナイクの河口には，ふたりの漁師が居ただけである。河口から2.5km位の地点に家を作り，林の伐開と水路掘削を始めた。仲間をよび集め，1959年には100家族，1964年には250家族が集まった。1969年にはスラウェシへ戻って，故郷から40家族を連れて来た。初めは稲だけ植えていたが，1966年にはココヤシを植え始めた。1983年現在，世帯数1195，人口8182人に膨脹し，5番水路まではココヤシ園，その奥13番水路までの開拓地が一大水田地帯となっている。川沿いのパッサールを中心に，全く独力で，堂々たる町ができ上っている。

ハジ・カンナはイスラム予言者と言われている。建物の内外，合わせて3000

人収容の大モスクで、祈りの導師をつとめるのは彼である。同時に彼は、大地主と噂されている。このような新規集落の指導者は、世俗的権威と、それを飾る何らかの文化的権威を必要とするのであろう。

ブギス人の「開拓」はきわめて投資的色彩が強い。右岸7番水路の開拓経過を聞く中で、偶然に判ったことだが、初代水路長は1959年から1963年にジャワ人人夫を雇って開拓し、1ha単位の土地136地片を作り、それを売り出した。この土地は最終的に78人の農民が所有するが、大きな地主がおり、5ha以上の地主8人で67haの土地を所有する。彼等は不在地主で、小作に米を植えさせている。開拓はまさに投資である。

もうひとつの特徴は、「開拓」地がしばしば無人化してしまうことである。農民開拓の進む沿岸帯は、もともと柔らかいマングローブ泥から成り、時に泥炭も深い。これを排水し、耕作を継続すると、当然、粘土の脱水収縮、泥炭の分解などに伴う沈下が生じる。バンジャール人は、その変化に対して、堤でココヤシ園をかこい、干潮時にのみ開いて排水する感潮樋管を設け、一種の干拓工法を行って、その保全を図る。ブギスはその種の対応が遅れる。乾季の高塩分逆水にやられて生育が悪くなると、他へ移る。対応が遅れる理由は、経験不足というより、開拓のとらえ方に、バンジャール人などと異なるモチーフがあるからである。ブギス人の開拓は決して定着志向ではない。

水田を中心とする開拓地の場合、開拓地放棄の傾向は誠に顕著である。林を伐開して、数年間稲作をつづけると、当然、草がふえる。バンジャール人は既述のような草処理技術をもっている。ブギス人もそれにならった方法で対処するのだが、断固、草に克つ気持が心の中に根づいていない。

草がふえる頃になると、移住者の中に、強盗を働く者が現われる。その背景には、先述のような大地主の存在と、他方、貧乏な日雇いと云った貧富差の著しい構造がある。草と強盗がふえると、ブギス人は逃げる。移動をくり返す。安全な、もっといい土地があるだろうと期待をつないで移動し、また「開拓」する。移動する時に、土地使用権なり、所有権の証書を既に入手しているのかどうか、本当のところは判らない。しかし、結果として、広大な一面のカヤツ

リ原が空しく無人の荒野として残される。これがブギス人の「開拓」である。一旦は陸封されたにしても、ブギス人は定着農民になり切れないものが心底のどこかにある。

ハジ・カンナが今、心配するのはそれである。生活は楽になって来た筈なのだが、装身具をつけた女性を狙って強盗が現われ始めたという。これからが、ブギス人開拓集落シンプルナイクの胸つき八丁である。

#### 4 ジャワ人の定着

ブギス人はその「開拓」にジャワ人クーリーを雇う。ジャワ人クーリーは、ブギス人程仕事が速くはないが、厳しい伐採作業に耐えるし、水路掘りも丁寧であるという定評がある。ジャワ人の多い水路に入ると、家敷園地の手入れのよさ、排水路の直線の見事さといったことから、すぐにジャワ人入植地とわかる。

シンプルナイクには一群のジャワ人クーリーが住みついている。左岸12番水路である。リーダーはパ・ミン (Pak Min) という東ジャワ出身の男である。彼等はシンプルナイクの多くの水路掘削を手がけて賃稼ぎをしていた。50×150ドゥパ (約2ha) の開拓代は粃1700kgである。ヘクタール当りに換算すると約4万円である。左岸12番水路はダエン・マディウン (Daeng Madiun) の依頼で1969年に開拓を終了したのだが、工費支払いができないというので、工費のかたに占拠し、掘削人夫で分割した。入植したのはジャワ人26人、ブギス人2人である。

この例は、ブギス人の開拓が、実際はジャワ人の手で施行される例を、偶然の機会に実証している。

ところで、ブギス人が草と強盗に追われて逃げ出したあとに、ジャワ人移民が残っていたり、新たに入りこんで来る例は多い。今、無人の水田地帯、ムアラサバックの東から、スンガイ・シアウに至る開拓地に、ジャワ人が少しずつふえつつある。彼等はブギス人の残したカヤツリ原にいとむ。その草処理技術は徹底した除草と水田化である。

本田準備はまず草刈りであるが、その一角は徹底的に除草し、まわりに畦をめぐらして、水田を作る。雨季は雨水がたまると、足で代かきし移植する。畦なしの陸田部分は棒で穴をあけ移植する。年々、水田をふやす。逆水のかかる立地だと、水路をまわして、きれいに区画された水田で二期作を行う。バンジャール人の草処理が、草の根網層はとらないで残し、焼畑的性格を示すのに対し、ジャワ人の草処理は永久水田化の方向から発想する。草を恐れず、強盗を恐れず、過密地帯の、土に生きる農民の感覚を定着させる。

ジャワ人農民は、また、栽培の多様化を行う。トゥンカル川とリアウ州プラウ・キジャン (Pulaukijang) の間は、ジャワ人移民のひとつのセンターであるが、ココヤシの下にコーヒーを栽培したり、水田に盛土をしてミカンを植えるなど、他の地域と一味違った営農を行っている。

ジャワ農民の移住は、政府の移民政策により、最近大幅に加速されている。ニッパ・バンジャン郡には 1983 年現在、27 のデサがあり、人口は 9 万 5600 人である。この内、政府開拓移民 (農民はペリタとよぶ) の村が 11 あり、その人口は 3 万 4200 人である。ペリタ村は多くが、沿岸移行帯にあり、沿岸帯の農民開拓地に比べて、不利な立地条件にある。定着率は自発的移民に比べて低くなることは避けられないだろうが、これだけ大量のジャワ農民の移住は、大きな変化を生むにちがいない。何よりも期待できるのは、彼等がてんでに試行錯誤を行って、適合する作物と土地利用法を見出そうとしていることである。また、潮汐湿地の排水水位調節は最大の眼目である。自然の調節が巧妙に働らく農民開拓地と異なり、乾きすぎているペリタ地区では、水路を分節方式で水位を変えて、地域ごとの調節を行うことが必要なのであるが、農民の中に、そのような試みが生まれていることは、やっと本物の定着が始まった印象を与える。

## V 中流部移行帯の生業

沿岸帯をはなれてジャンビへ向うと川筋の光景は一変し、見渡すかぎりの湿地林である。1820 年に Crooke が観察した状況と変らないだろう。航空写真で

見ると、単調なじゅうたんをしきつめたような密林である。この地域を、私は下流部中央帯とよんでいる。川沿いには自然堤防が発達しているが、川岸から100 mも入ると厚い泥炭になる。泥炭の下には低位段丘面がある。

クンペ川の合流点、タンジュンに至ると、泥炭湿地の中に突っこむ形で幅広い自然堤防帯が現われる。中流部移行帯である。この地域には、ムアラ・ジャンピなどの古い集落がある。中流部移行帯の住民の生業は、蛇行跡低地での減水季稲、湿地林の産物の抽出、川筋での漁撈である。クンペ・イリールの元パッシラ、サマン (Saman) 氏によると、水田は彼の曾祖父の世代に開かれた。それはサワ・ダトゥ (Sawah datuk) とよばれる。その時期は前世紀前半と推定される。それ迄は、今、ゴムが植えられている段丘面がラダンであり、点播オカボを植えていた。祖父の代までは農民であったが、父の代にタンジュンへ移り、商人になった。1920年頃、メダンからゴムが導入され、大変な勢いでひろまった。

タンジュンには1810年代の末にジャンピの前哨基地の港がオランダ人の手で作られる。やがて、ジャンピ=シンガポール航路が始まり、その船が、タンジュンに投錨することから、積出し港として、タンジュンは次第に大きくなる。サマン氏の祖父の頃には300戸、長さ3 kmの大きな集落を形成する。

タンジュンの産物は第一にロタンであった。太さによって幾種類にも分かれる。次にジュルトン (天然ゴム)。これは、以前は、コムリンやタバヌリの住民が採集に来ていた。村人は、ロタンの採取で、ジュルトンにまで手がまわらなかった。しかし、サマン氏の口調には、林の中でのキャンプが必要なジュルトンとりに対する明らかに侮蔑的なひびきがある。稲作の不調、ロタンの減少におされて、村人がジュルトン採取を始めたのは、ここ3年来である。

ガハル (gaharu, 沈香の類) もあった。これはガハルの木や、ラミン (ramin) の心材にある、病変により生じた樹脂である。かつてシュリヴィジャヤの重要な産品のひとつであった。

ゴムは品質が様々であった。というのは、酢を入れて固める時に、内部に木や土をまぜて増量するからである。また、水ぶくれのものがある。商人はそれ



らに目利きをして、買い値をつけた。私の観察では、まぜものの多い粗悪なゴムは、現在も全く変わっていない。

バラム・メラ (baram merah) という樹脂は、クブ (kebu) 人が持って来て、タバコと交換した。堅く良質の樹脂だった。

林業はオランダ時代は盛んではなかった。しかし、ブングル (bunguru, *Lagerstroemia* spp.) は船材に優れており、沿岸帯に多い船大工から、需要が多かった。今も同様である。沿岸帯には元来ない木で、淡水湿地に限られる。川から200m 位の間には殊に密集している。船大工指定の寸法に従って、タンジュンで粗挽きしたものを沿岸帯へ運ぶ。船大工が仕上げをする。舟大工はブギス人が多い。そういうことと関係があるのか、タンジュンから沿岸帯への分村がある。シンパン近くの、トゥルック・リマオ (Teluklimau)、スンガイ・ラムブート (Sungailambut)、トゥルック・クラディ (Telukkeladi) 等の小集落は、タンジュンの分村である。そこへ出作りに行く者も多い。

村の稲作は乾季に行う。水田は流路跡にあり、サワ・パヨ (sawah payo) といわれる。サワ・パヨは中央部が皿状にくぼみ、雨季は1 m以上湛水するので、栽培不可能である。5月初めに、畑に点播陸苗代を準備し、2回移植法で水のひいた所から植える。11月から12月に穂摘みを行う。

## VI 土地利用のエスノロジー

最後にふれたサワ・パヨは、上流のミナンカバウ高地から永久水田技術が低湿地に移来したものと考えている。ミナンカバウの水田そのものは、火山山麓での畑作オカボから変化したものであろう。中流部の支谷域には、移植畑、つまり、畑に苗を移植する奇妙な稲作も見られるのだが、これなども、常畑のオカボが水田化する過程を示している。中流部には、もうひとつ、水門つきのサワ・パヨがある。これはいわば、ため池と水田を一体化した構造で、しかもそれを水牛蹄耕によって地拵えをする。

いささか荒けずりだが、バタンハリ川流域について100年前の土地利用を想

定すると、沿岸帯は湿地焼畑（陸田）とサゴ、中央帯は湿地林、中流部移行帯はサワ・パヨとラダン、中流域はラダン、移植畑、サワ・パヨと蹄耕、それにサゴ、といったものが考えられる。

このパターンは、マラッカ海峡をはさんで対岸、マレー半島にも全く同じものを見出すことができる。マラッカ海峡をはさむ湿地域とその周辺には、共通の農耕圏が想定できそうである。その稲作農耕の形態は、いくつかの民族要素に分解できる。パラシと掘棒による湿地焼畑は、いわゆる沿岸ムラユの伝統的生業である。他方湿地焼畑を定着水田に変換し、沿岸帯に潮汐水田を開発したのはバンジャール人の創案である。また、移植畑、サワ・パヨ、蹄耕はミナンカバウ人の農耕要素である。

この三つの民族要素が作るマレー型湿地農耕の流布という点で、ブギス人の役割を忘れることはできない。熱帯降雨林を強烈なエネルギーで、ヤブに変換する「開拓」を行い、地方的のみならず、航海者として、遠隔地にまでマレー農耕を流布する。

最後にジャワ人の役割である。ムラユやブギス人の通過型土地利用に対して、ジャワ人は多様な定着型土地利用を作りあげる。ジャワと「マラユ」の対立は定着農民文化と移動漁民文化の対立でもあった。今世紀のジャワ人大量移民の歴史的意味は、クルタナガラ王が「マラユ」をジャワの前進基地にしようとした意図の継続と見ることができる。結局、最後の未開地、潮汐湿地に確固とした農耕形態を作りあげるのはジャワ人であろう。シュリヴィジャヤがうたかたに消えてしまったのに対して、ジャワは無数の遺跡を残した如くに。

#### 注

- 1) 本節の歴史資料に関する記述は、特に指定しないかぎり次の諸文献に依る。Coedès 1947 (Cowing 訳1975), Krom 1931 (有吉訳 1984), Schnitger 1964, Suleiman 1976, 1981.

#### 参考文献

- Andaya, L. Y. 1975. *The Kingdom of Johor. 1641-1728*. Oxford Univ. Press, London.  
 Coedès, G. 1964. *Les États Hindouisés d'Indochine et d'Indonésie*. Translated by Cowing, S. B. 1975. *The Indianized States of Southeast Asia*. Australian National Univ. Press, Canberra.

- Crawford, J. 1856. *A Descriptive Dictionary of the Indian Islands and Adjacent Countries*. Reprinted by Oxford Univ. Press. 1971. London.
- 古川久雄, スビアンディ・サビハム. 1985. バタンハリ川流域低湿地の農業景観, その1. 地形と堆積層序. 東南アジア研究 23(1): 3-37.
- Hirth, F. & Rockhill, W.W. (Translation). 1970. *Chau Ju-Kua. His work on the Chinese and Arab Trade in the Twelfth and Thirteenth Centuries, entitled Chu-Fan-Chi*. Ch'eng-wen Publ. Comp. Taipei
- Krom, N. J. 1931. *Hindoe-Javaansche Geshiedenis*. 有吉巖訳. 1984. インドネシア古代史. 道友社. 天理
- Polak, B. 1975. Character and Occurrence of Peat Deposits in the Malaysian Tropics. In *Modern Quaternary Research in Southeast Asia I*, edited by G. J. Bartstra and W. A. Casparie pp. 71-81. A. A. Balkema. Rotterdam.
- Schnitger, F.M. 1964. *Forgotten Kingdoms in Sumatra*. E. J. Brill. Leiden.
- Suleiman, S. 1976. *Monuments of Ancient Indonesia*. Pusat Penelitian Purbakala dan Peninggalan Nasional. Jakarta.
- Suleiman, S. 1981. *Sculptures of Ancient Sumatra*. Pusat Penelitian Arkeologi Nasional. Jakarta.
- Tideman, J. 1938. *Djambi*. Koninklijk Vereeniging Koloniaal Instituut. Mededeeling No. XLII. Amsterdam.

(古川 久雄)